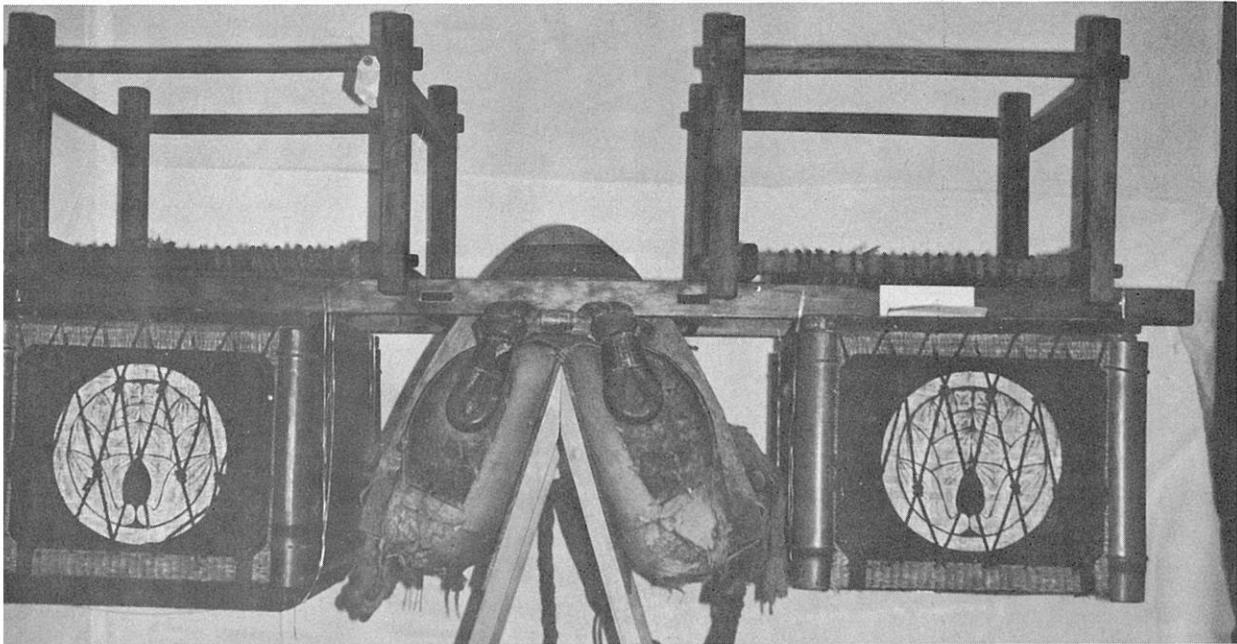


糸

車

編集 山形村ふるさと伝承館



金らん どんすの 帯しめた

花嫁姿の お嫁さん

まだ見ぬ簞さん 待つ里へ

お馬にゆられて 行くわいな

シャン シヤラ

シャン シヤラ 鈴つけた

お馬にゆられて 行くわいな

写真で見るふるさと 伝承館

— 婚礼関係衣装から —

◀ 打掛

近世の上流婦人の上着
小袖形式で、帯を締めた上
に打ち掛けているから、この
名がある。かいどり。

㊟「襦襷」の字をあてる
ことがあるが、これは
元来、中国の鎧を布で
儀式用にしたものであ
る。



▶ とめ袖



振袖に対して袖丈の短い婦人礼装用の黒地裾模様の着物



▶ 大袴

嫁入り衣裳は特に袴を大きくとるので、この名がある。
袴：ふき返し、袴・綿入れの袖口や裾の裏の布を
表に折り返して縁の様にぬいつけたところ

ふるさと伝承館 のあゆみ

その3

平成二年五月二十四日

松本市考古博物館特別展に
出展の為弥生土器一個同館
会員五十名視察来館

平成二年六月五日

松本市考古博物館特別展に
出展の為弥生土器一個同館
に貸与

平成二年六月十三日

南安梓川村近世研究会男子
十七名女子三名来館

平成二年九月八日

松本市考古博物館より弥生
式土器返納される

平成二年十一月三十日
館報第一号発行

平成二年五月二十六日
道祖神と新そば祭りに参加
そばがき試食会を催す

平成三年七月十八日
ロードレース大会無料公開

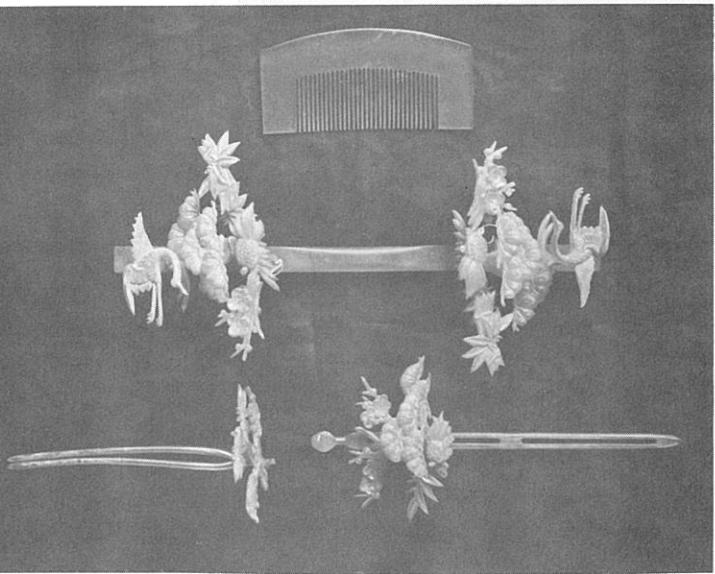
西部支会の小学校新任職員
男女五名、校長同道にて研
修に来館

◀ 髮 飾 り

櫛 筍 簪

こうがい
(髪搔の音使)

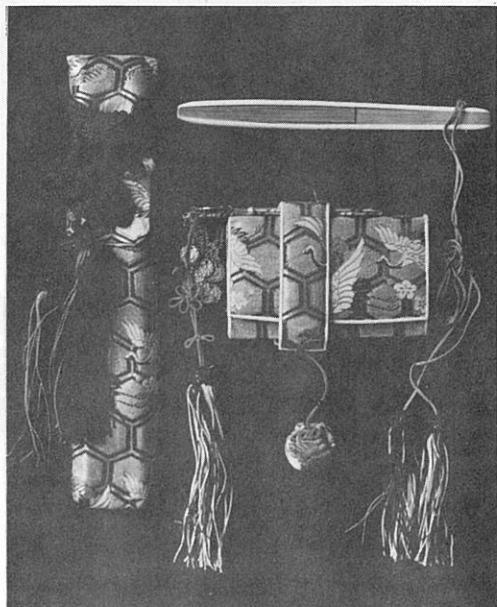
男女共に髪をかきあげるのに用いた細長い具、後世婦人の髪にさして飾りとした。金銀、べっこう、瑪瑙などで作る。



▼ 带締と抱帯

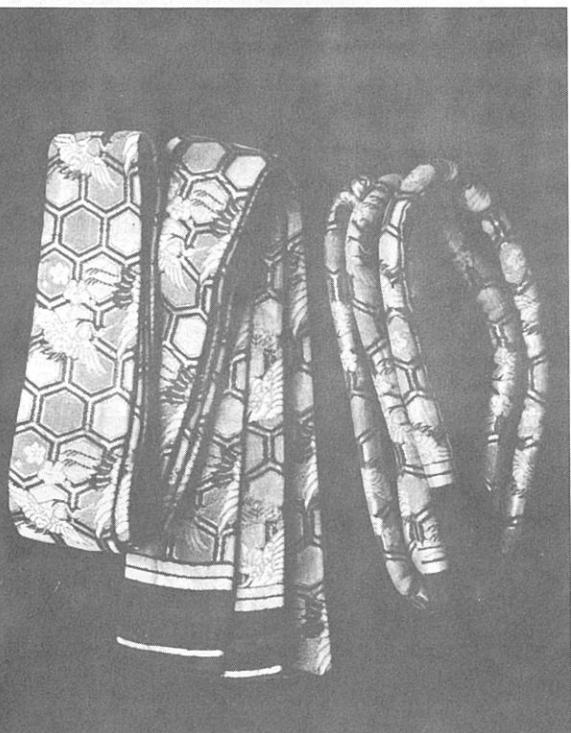
結婚衣裳用の帶締と抱帶である。

帶締は帶どめの金具のつかないもので、帶の解けなないように帶の上に締める紐である。抱帶は足ばきのいいように帶の上にしめた。それが次第に装飾用となり、しごきに変ってきた。



▲ 扇子、筥迫、懐刀

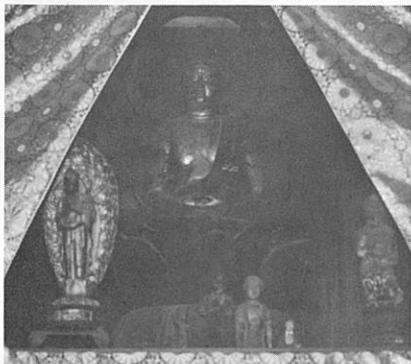
扇子は花嫁が手に持ち、筥迫はふところに挟んで持つ装身具である。江戸時代奥女中が紙入れとして使用したが、今はもっぱら礼装の時に装饰として使われる。また懐刀は懷中に藏める守り刀であるが、花嫁は装饰用に帯に挟んでおく。



平成三年九月二十一日
九時よりコレクション展の準備を行う
平成三年九月二十二日・二十三日
齊藤コレクション展を開催
来館者三百人余

平成三年八月三十一日
館報編集委員会開催
平成三年九月八日
運営委員会にて齊藤コレクション展の打合せを行う

むらの今昔物語



小坂の大日堂

天正十年（一五八二）八月
松本城主小笠原貞慶が法借寺
に出した安堵状に、大日分と
して一貫五五〇文（約7石）
の寺領が記されている。その
頃既に法借寺の管理下に大日
堂があつたのである。

その後江戸時代に入つて堂
はすっかり荒廃し、本尊の大
日如来も一時行方不明になつ
たが、宝永二年（一七〇五）
宝積寺五世満眼和尚が、阿弥
陀如来に作り変えられて松本
領真々部の淨土宗千念寺に安
置されているのを知り、箱代
一両二分と酒三升で引取ると
ともに、村中で大日堂を再建
し開眼供養をしたと記録され
ている。

本尊は、像高八六・四cm
寄木造り玉眼入り、法界定印
を結ぶ胎藏界の大日如来坐像
である。鎌倉時代の作風を残
しており、国の重文に指定さ
れている。

考古学あれこれ

縄文土器——貯める——

殿村遺跡の発掘出土土器中
最大の土器です。直径約三六
センチ、器高七〇センチを測る優
品です。縄文時代中期中葉の
十一号住居地より出土しました。

こんなに大きな土器が何に
使われたかですが、その大きさ
から、物を貯めておくのに用い
られたものと思われます。

縄文時代の石器の中に矢尻
(石鏃)があることから、獣
や鳥を狩、肉食を中心にして
いたと思われるがちですが、そ
れらはいつも手に入るもので
なく、危険もともないます。
彼らの主食は、安全に、大量
に採集でき、し
かも保存がして
おける植物性食
料だったのです。
この時代豊富に
あつた、ドング
リ・クリ・トチの
実などの堅果類
がこの土器に貯
められ、毎日の

文化財③

宗福寺の十王石像

村では最も古い寛永十一年
(一六三五)の記年銘があり
十王のほか地藏尊・奪衣婆か
ら地獄の鏡まで十七点が完全

に揃つておらず、全国的にも数
少ない十王石像である。
一切の衆生は前世の善惡の
業によつて地獄・餓鬼・畜生
・修羅・人間・天上の六道を
箇所が多く美術的価値を落し
てゐるのは残念である。

しかし、村としては清水寺
の智拳印を結ぶ金剛界の大日
如來と共に、村最古の鎌倉期
の仏像として重要な文化財で
ある。

受け取るのに始まり、二七日・
三七日・四七日・五七日・六
七日・七七日・百か日・一周
年・三周年に順次各王の序で
裁断を受け来世の生所が定ま
るという。
生前に十王を信仰すると死
後の裁判が有利になるという
が中世からの十王信仰である。

